

象徴詞を動詞化する形式の変遷

川瀬, 卓
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8921>

出版情報 : 語文研究. 99, pp.11-24, 2005-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

象徴詞を動詞化する形式の変遷

川 瀬 卓

0. はじめに

日本語では、象徴詞は主に副詞として使われることが多い。しかし、時には動詞となり、文の必須要素となることもある。現代語で象徴詞を動詞化する形式は大きく二つにわけられる。接尾辞によって動詞化するもの、「する」と結びついて動詞化するものの二点である。現代語では、「する」が最も一般的な動詞化形式であると考えられる。

ひやっとする、にやりとする、いちゃいちゃする、うろろうする、ぎらぎらする、ざわざわする、どきどきする、ばたばたする、べとべとする、むかむかする、わくわくする

接尾辞によって動詞化したものについても以下、例をあげる。

いちゃつく、うろつく、ぎらつく、ざわつく、ばたつく、べとつく、むかつく

きらめく、ざわめく、そよめく、どよめく、ゆらめく

いらだつ、ぼやかす

これらは畳語形の象徴詞 ABAB の AB を語基として、それに接尾辞がついて動詞化されたものと考えられる。「つく」による動詞が多く、「つく」は象徴詞を動詞化する接尾辞の代表的なものと言える。

言葉は常に変化していくものであるが、象徴詞についても例外ではなく、象徴詞を動詞化する形式は近世期において大きく変化をとげた。本稿では、「めく」「つく」といった接尾辞による動詞化と「する」による動詞化のそれぞれの変遷を見ていくとともに、それらを総合的に捉えて考察していきたい。

1. 先行研究

現代語において、象徴詞を動詞化する接尾辞は「つく」が代表的なものである。しかし、『古語大辞典』「めく」の項に「院政期以後中世を通じて、(中略)象徴語(擬声・擬態語)と結合した例がとくに多数見いだされ、造語力を長く持ち続けた」とあるように、中世は「めく」が最も生産力を持った接尾辞であっ

たようである。蜂矢 (1986) は、源氏物語、今昔物語集、平家物語、史記抄、日葡辞書などを調査し、「メク型動詞は、中古から中世にかけて、語基が名詞のものが多いところから語基が形状言のものが多いところへと変遷している」と述べ、中世において接尾辞「めく」が象徴詞を動詞化する接尾辞として発達していることを示している。

また、象徴詞を動詞化する接尾辞の変遷を論じたものとして平林 (2002a)、(2002b) があげられる。平林 (2002a) では主に「つく」に注目し、「つく」の初出時期の比較により、象徴詞を動詞化する接尾辞が、「めく」から「つく」へ推移したのではないかと推測した。平林 (2002b) では、平林 (2002a) を受け、同一の象徴詞にそれぞれ「めく」と「つく」が結合した例の初出時期を比較し、象徴詞を動詞化する接尾辞が「めく」から「つく」へと変わったことを指摘した。

一方、象徴詞を動詞化する「する」については、現代語における分類や意味的な研究がほとんどである。通時的考察としては、森田 (1953) や前島 (1967)、鈴木 (1984) の中で触れられている点が注目される。以下に森田 (1953) より、(二) 形態の歴史的概観 三、近古と四、近世を引用する。

殆どのものは「と」をとるが、「— する」の如き用法も後期頃よりあらはれる。即ち日葡辞書では「— とする」「— とした」の例が多いが、その中に次の如きがまじつてゐる。

Botoboto xita. Chibochibo xitacoto. Munega dacudacu suru.
Dosacusa suru. Nitonito suru

かゝる用法は江戸時代になると大分多くなる。(二 - 三、近古)

特に言ひそへるべき点は、これまでは「— とする (とした)」の如く、直接「する」に続く形よりも、「と」に連つて「する」と連絡する形が本格と思はれたのであるが、現在はむしろ直接「する」と接続するのが一般的となつた。(二 - 四、近世)

以上のように、「する」について構文的な変遷を指摘している。

平林 (2002a)、(2002b) は、いずれも『日本国語大辞典』の初出例を参照し、索引類および電子テキストで検索をおこなったもので、あくまで全体的な枠組みから考察するという立場をとっている。そのため、大まかな流れを述べているものの、「めく」と「つく」の具体的な変遷過程、時期について不十分であるという問題点がある。辞書等を手がかりとした初出時期の比較だけな

く、実際の資料に当たってその使用実態を見るが必要と考えられる。森田(1953)、鈴木(1984)は、「する」について構文的な変遷を指摘しているが、中世後期に象徴詞に直接「する」がついた例が見えはじめ、現在にいたっては「とする」から「する」が多くなった、という大まかな流れの指摘のみで、具体的な数量のデータは十分に示されていない。

本稿では、これらの先行研究を踏まえた上で、主に断本を資料として、近世期を中心に象徴詞を動詞化する形式について、その実態を明らかにする。また、接尾辞による動詞化と「する」による動詞化を総合的に捉え、両形式の関係についても述べたいと思う。

2. 接尾辞による動詞化形式

2 - 1. 中世

近世について考察する前に、中世において「めく」「つく」がどのような状況にあったかについて触れておきたい。中世末、象徴詞を動詞化する接尾辞としては、「めく」がかなりの生産力を持っていた。日葡辞書や抄物資料を調べると相当数の「ABめく」という動詞が拾える。^(注3)

ロドリゲスの『日本大文典』「副詞に就いて」に、

同一語を繰返した置語があって音響とか事物が如何に作られるかといふ状態とかを示す。その中にあるものは初の語に助辞 Mequi, u (めき, く) を添へて動詞をつくる。(中略) Fatamequ (はためく), batamequ (ばためく), bitamequ (びためく), garamequ (がらめく)。

とあり、当時「めく」が象徴詞を動詞化する接尾辞として意識されていたことがうかがえる。

『邦訳日葡辞書』には象徴詞についた「めく」が91語あるのに対し、「つく」は8語しかないという点でも「めく」の勢力が強く、「つく」はまだ勢力を強めていないことがわかる。また、平林(2002b)でも指摘があるが、「めく」と「つく」両方見られるものが7例見られる点で、「つく」が「めく」に変わるものとして侵出し始めていることがわかる。

2 - 2. 近世

近世期における動詞化形式の変遷について主に断本を資料として探ってみることにする。断本は近世期を通して出版されており、同一のジャンルで言語の史的変遷を探るのに有効な資料と考える。資料はすべて『断本大系』によった。

また、近松浄瑠璃や洒落本、滑稽本、人情本なども参考にしていき^(注4)たい。まず、前期噺本といわれる第一巻から第八巻までの「ABめく」「ABつく」を見てみる。用例のいくつかを示し、用例数、異なり語数をまとめたものを表1として掲げ^(注5)る。

- 1 あまりあはてふためき、其ぬしへの足をバとりちかへ、(醒睡笑1623)
- 2 みなへ口はうごめけ共、いひえざるところに、(百物語1659)
- 3 寺へのつり鐘共八、鐘木うごきふらめきて、(かなめいし1661-1673頃)
- 4 地の底八、どうへと鳴はためきて、京中さはぎ立たるとよみに物音も聞えず。(かなめいし1661-1673頃)
- 5 百姓共是をなげきて、いかゞせんとひしめきあへり。(一休はなし1668)
- 6 その身八かミこで、ごそめき、うそさむげなるなりにて、(一休はなし1668)
- 7 知行所の百姓来り、だい所のあたりちろめきぬるに、(私可多咄1671)
- 8 そこをひくなど、まなこをひからせ、鏝のぐ八たつく脇差をびくめかひてぞ、おどしにける。(杉楊子1680)
- 9 あいくちのわきさし、扇を弓手にぶらつかせ、(枝珊瑚珠1690)
- 10 旦那気もをつぶし、やれ医者よ、針立とうろつく所へ(軽口出宝台1719)
- 11 しかし、われも中風氣にて、ぐにやつきますといへバ、(口合恵宝袋1755)

表1 第1～8巻

	めく	つく
用例数	83	11
異なり語数	23	9

「ABめく」は用例数83例、異なり語数23例、「ABつく」は用例数11例、異なり語数は9例という結果であった。「ABめく」はかなり用例数が多いが、83例中45例が、「ふためく」「ひしめく」である。また、1や4の「あわてふためく」「鳴りはためく」のような複合動詞の例が多く見られる。「ごそめく」「ちろめく」「びくめく」のように、現代語では見られない語も多いが、複合動詞を作り出すなど、すでに語彙として確立したものも多い。全体としては中世ほどの生産性は見られないようである。つまり、新たな語を生み出す生産力自体はすでに失っているものといえよう。「つく」は新たな語を生み出していつているものの、全体の用例数からすると、勢力をもっているとは言いがたい。まだ、生産力を持ち出しはじめた段階で発達の途中にあると考えられる。参考に近松浄瑠璃の世話物(1703～1722)の結果も表2として示す。

表2 近松浄瑠璃 (1703～1722)

	めく	つく
用例数	16	13
異なり語数	10	10

次に後期漸本といわれる第九巻から第十六巻の用例をいくつか示し、用例数、異なり語数をまとめたものを表3として掲げる。さらに、第一巻から第十六巻通しての用例数の推移を表4として示す。

- 12 葉箱よりヒを取いだし、これでもかとひらめかして見せれば、
(聞上手二篇1773)
- 13 イヤモ、腹がどぶついで一口もいけませぬ。
(軽口五色帟1774)
- 14 しらぬものに時宜をして、うろつく鼻を見やう。
(一の富1776)
- 15 鼻うごめきて高く世に示てふ、是釈子の掟規にあらず、
(振鷲亭漸日記1791)
- 16 ごそつく音に、又内義目をさませば、火八きへてまつくらがり。
(庚申講1797)
- 17 若盛の左官が、花見遊山のと世間八ざわつくに、
(庚申講1797)
- 18 大酩酊にて、ぶらへもどり、なんじやへとひよろつけ八、
(新話違なし1797)
- 19 雨のふるもいとはず、八丁堀のかしのあたりをぶらつくと、(滑稽好1801)
- 20 どふだ、おやぶん。しつかりとさつせへ。手かふらつくぜ。
(妙五天連都1811)
- 21 ちとうだつくのを止んかいの。
(小倉百首類題話1823)

表3 第9～16巻

	めく	つく
用例数	8	55
異なり語数	5	22

表3を見てわかるように、用例数のそれほど多くなかった前期漸本に比べると「つく」が勢力を増して、「めく」と「つく」の勢力が逆転している。「つく」は異なり語数、用例数とともに増え、「ごそつく」「ふらつく」など以前は「めく」だった語が「つく」に変わっている例も見られる。表4を見てみると、第九巻において「つく」が逆転している。表2で示した近松浄

表 4

年 代	巻	めく用例数	つく用例数
~ 1673	第 1 巻	15	1
	第 2 巻	8	0
	第 3 巻	24	0
~ 1704	第 4 巻	18	3
	第 5 巻	8	1
	第 6 巻	4	1
~ 1736	第 7 巻	3	3
~ 1770	第 8 巻	3	2
1772・1773	第 9 巻	1	10
~ 1776	第10巻	2	2
~ 1781	第11巻	0	3
~ 1795	第12巻	2	8
~ 1801	第13巻	1	15
~ 1812	第14巻	0	9
~ 1830	第15巻	2	3
~ 1885	第16巻	0	5

瑠璃と合わせて考えると、「つく」は1700年代に入り、勢力が増していっているようである。また、1800年前後において、特にその勢力が盛んな様子が見られ、最終的には再び落ち着いている。^(注6)遊子方言、辰巳之園などの洒落本や浮世床、春告鳥を見ても「めく」はほとんど見当たらなかった。

以上のことから、接尾辞による象徴詞の動詞化は中世末に「つく」に変わり始め、近世後期において「めく」から「つく」へとほぼ完全に推移したといえる。しかし、「つく」は新しい形式として確立したが、その後、象徴詞を動詞化する形式の中核を担うものにはなっていない。そのことと関係するものとして、次に「する」を見ていきたい。

3. 「する」による動詞化形式

象徴詞 ABAB を動詞化する場合、先の森田 (1953)、前島 (1967)、鈴木 (1984) で指摘されているように、本来は「ABAB する」ではなく、専ら「と」を伴って「ABAB とする」という形式であったようである。蜂矢 (1998) 第四篇第四章でも「このダクダクスルなどのトを伴わない重複情態副詞 +スは、本来はトを伴う重複情態副詞ト+スが、中世末以降、トを伴わない同 +スの形もとるようになったものと見られる」(p.318) との指摘があり、象徴詞に限

らず重複情態副詞に「する」がつく形は本来必ず「と」を伴っていたようである。

これらの指摘を踏まえ、断本において「ABAB とする」と「ABAB する」が通時的にどのような様相を見せるかを述べたいと思う。まず、「ABAB とする」と「ABAB する」の分布を 表5 として示す。

表5

年代	巻	とする用例数	する用例数	とする異なり語数	する異なり語数
~ 1673	第1巻	1	0	1	0
	第2巻	4	0	3	0
	第3巻	7	2	6	2
~ 1704	第4巻	6	0	6	0
	第5巻	8	2	6	2
	第6巻	7	1	5	1
~ 1736	第7巻	6	7	6	7
~ 1770	第8巻	3	8	2	7
1772・1773	第9巻	4	8	4	8
~ 1776	第10巻	6	8	6	6
~ 1781	第11巻	4	14	4	12
~ 1795	第12巻	6	11	6	9
~ 1801	第13巻	2	13	2	8
~ 1812	第14巻	7	12	6	9
~ 1830	第15巻	2	17	2	15
~ 1885	第16巻	1	21	1	16

表5 を見てみると、1600年代の断本においては、「ABAB する」はほとんどその姿をあらわさないことがわかる。1700年代に入ると「ABAB する」がよく使われ始め、「ABAB とする」と逆転する。参考として調査した近松浄瑠璃（1703～1722）や洒落本（1770～1798）では、「ABAB とする」がほとんど見られなかったことと合わせて考えると、「ABAB する」は1700年代には一般化していたものと考えられる。断本においては、第十五巻、第十六巻（1813年以降）江戸末期に、「ABAB とする」の衰退が著しく、ほとんど「ABAB する」になっている。

「ABAB とする」から「ABAB する」へという流れは、次に示す同じ象徴詞 ABAB をとったものの用例を比較しても見られる。

22 じやう六ばかりかいていてうかへとしたるゆへでく介や三四郎をよびてききやれ。

(鹿の巻筆1686)

- 23 あるくもちがあかねへと、まのぬけたやうにうかへする。
(駅路馬士唄1814)
- 24 ながひはおり、ぬがれもせず、うろへとしているを見て、
(軽口機嫌囊1728)
- 25 きもをつふし、拍子木がないへとうろへするを、 (わらひ鯉1795)
- 26 若い衆集り、咄しの中へ、友達、にこへとして来り、(寿々葉羅井1779)
- 27 只こゝろによるこぶとき八、おのづからうれしいが顔に出て、にこへするものでござる。
(珍学問1803)
- 28 おくに八よき事が有に、とぐちにぶらへとしておる物八、
(当世軽口咄揃1679)
- 29 ふんどしがたるんで、きんたまかぶらへしている。 (詞葉の花1797)
- 30 よくあらひ、海ばたにすへ中へこぬかを入れてをきけれ八、海中一ばんのただこ中へはいり、まじへとしてあたり。 (露休置土産1707)
- 31 まじへして、もうきそうなものじゃ。今宵もさむしくひとりねか。
(馬鹿大林1801)

22、24、26、28、30と23、25、27、29、31のように同じ象徴詞の場合「ABA Bする」の形をとるものは「ABAB とする」よりもあとの年代に現れるものが多いという傾向が見られる。

また、表5の「とする」と「する」を合わせて見てみると、前期に比べ後期になると用例数、異なり語数とも多いという傾向も見え、近世期において徐々に発達していているといえる。接尾辞形式によるものより、多くの象徴詞を動詞化している形式である。また、近松浄瑠璃においては「めく」や

表6

近松浄瑠璃 (1703~1722)

	めく	つく	とする	する
用例数	16	13	1	13
異なり語数	10	10	1	11

春告鳥 (1836)

	めく	つく	とする	する
用例数	1	5	5	16
異なり語数	1	3	5	15

「つく」による動詞化が「する」より多いのに対し、春告鳥では「する」による動詞化のほうが多いという傾向も見られた。^(注7)

以上見てきたように、ABAB型の象徴詞を「する」によって動詞化する形式は、「する」と直接結びつけず、「と」を介することによりそのつながりが保てた状態だったが、近世期を通して、徐々に「ABABとする」から「ABABする」に移っていった。

「ABABとする」のように「と」が必須であった時代においては、「ABABと」が「する」を修飾しているという関係にあると見ることができる。つまり、句を形成している。それが「ABABする」という形もとれるようになったということは、句をつくる形式が語を作る形式側に近くなり、その形態的緊密性を高めたといえないだろうか。^(注8) 一語のサ変動詞のようになることにより、「する」はABAB型象徴詞との結びつきが強まる方向で発達していったと考えられる。しかし、「する」があくまで統語的な動詞化であるということは注意しておきたい。

4. 接尾辞と「する」との関わり

これまで、接尾辞「めく」「つく」と「する」について見てきたが、それらの関わりについて考察していきたい。

使われている用例を見てみると近世において「めく」はかなり固定化したものとなっており、すでに新たに語を作り出す生産力は失っているといえよう。一方、「つく」は近世前期より新たな動詞を生み出す形式として力をのび始める。徐々に新たな語を生み出し、近世後期において定着したと見られる。しかし、象徴詞を動詞化する形式の中核を担うものにはなっていない。それはなぜだろうか。

接尾辞による動詞化は語彙的である。一方、「する」による動詞化は統語的である。接尾辞による動詞化は次第に象徴詞との結びつきを強くしていき、慣用的な語へと向かうと考えられる。「つく」は、初めさまざまな象徴詞と自由に結びつき語を作り出していったが、慣用的な表現へとなっているのではないだろうか。それに対し、「する」はあくまで統語的な動詞化であり、形態的な緊密性を高めつつも、その生産性を失うことなく発達していったと考えられる。

象徴詞はその名のとおり、音象徴により意味が支えられ、成り立っている。壽岳（1956）で、「擬声語が、原理的には音感そのものに依存して意味を生ず

るのである以上、畳語の原型である語幹に存在する音のみが意味の決定素たり得る」と述べられているように、その形態そのものが、象徴詞であることを示し、かつ意味を伝えるような一群である。このことを踏まえるならば、ABAB という象徴詞を動詞化するとき、AB を取り出して接尾辞によって動詞化するよりも、「ABAB する」のように ABAB を生かした形で統語的に作り出すほうが、その音象徴性を生かした形で意味を伝えることができるといえる。現代語において、接尾辞によるものは、「ABAB する」で言い換えることのできるものが多い。例えば、「いちやつく」「ざわつく」「べとつく」「むかつく」を「いちやいやする」「ざわざわする」「べとべとする」「むかむかする」にすることができる。つまり、「する」による動詞は接尾辞による動詞をほぼ包括する形で存在しているといえる。^(注9)

また、象徴詞は ABAB 型によるものばかりではない。今回は ABAB 型に限って比較をしたわけであるが、より多くの象徴詞を動詞に取りこむには形式動詞「する」のほうが、ABAB 以外のものも動詞化できる。接尾辞による動詞化は AB という形態的制約がある。しかし、象徴詞には「A ッと」「AB と」「AB リと」「A ン B リ」など、「ABAB」以外のさまざま語が存在する。その点で接尾辞による動詞化は動詞化形式として限界があるといわねばならない。それに対し、「する」による動詞化は象徴詞の語形に関する制約がゆるい。具体例として、「にやりとする」「きらきらする」「ちょこまかする」「ぼんやりする」などがあげられよう。つまり、「する」による動詞化は、接尾辞による動詞化に比べ、象徴詞をより網羅する形で動詞に組み込むことが可能な形式なのである。

「する」は象徴詞を動詞化する形式として最も一般的なものである。近世において、接尾辞として「つく」が発達しつつも、その後、象徴詞を動詞化する形式の中核的存在になれなかったのは、この「する」による形式があったからではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

象徴詞の動詞化形式には、大きく分けて接尾辞によるものと「する」によるものがある。本稿では、主に嚙本を資料として、近松浄瑠璃や洒落本、滑稽本、人情本も参考にしながら、その変遷過程を見てきた。

接尾辞による象徴詞の動詞化は、中世末に「つく」に変わり始め、近世後期で定着し、「めく」から「つく」へとほぼ完全に推移したといえる。一方「す

る」のほうは、1600年代の斬本では、「ABAB とする」が多く、「ABAB する」はほとんどその姿をあらわさない。1700年代に入って「ABAB する」がよく使われ始め、「ABAB とする」と逆転する。江戸末期になると、「ABAB とする」が著しく衰退して、ほとんど「ABAB する」になっている。このような流れで、近世期を通して「ABAB とする」から「ABAB する」へと変遷していった。また、近世を通してみると、「する」形式による動詞化は増えていく傾向にある。「つく」による動詞化は語彙的であるのに対し、「する」はあくまで統語的な動詞化であり、形態の緊密性を高めつつも、その生産性を失うことなく発達していったと考えられる。

以上、主に量的な側面に注目して、動詞化形式の変遷過程を見てきた。今回は残念ながら意味的な側面については深く触れることができなかった。今後は、影山（2004）で提示されたような分類を史的にみると、どのような様相をみせるのかなどの質的な側面についても検討していく必要がある。^(注10) また、江戸語と上方語に関しても十分に考慮することができなかった。現在、方言において象徴詞の動詞はさまざまなバリエーションがあることが考えられる。今後は方言も視野に入れつつ、江戸語資料と上方資料を慎重に扱う必要がある。今後の課題としておきたい。

注

- (注1) 音、あるいはものの様子を象徴的に言語で表現したもので、一般にオノマトペ、擬音語・擬態語などと呼ばれるもののことである。
- (注2) 接尾辞によるものとしては「だつ」「かす」など他にも考えられるが、「めく」「つく」にくらべ、少数で限られているので、今回考察の対象にしていない。また、「する」に関しては「めく」や「つく」と対応しうると考えられる象徴詞 ABAB についたものを主に取り扱うことにする。
- (注3) 抄物資料集成、続抄物資料集成における「象徴詞+めく」を試みに索引で調べてみると、
用例数326例、異なり語数69語
語構成の種類
「A めく」用例数66例、異なり語数7語
「AB めく」用例数128例、異なり語数47語
「AA めく」用例数121例、異なり語数13語
「ABC めく」用例数11例、異なり語数2語
という結果が得られた。抄物資料集成、続抄物資料集成の索引は網羅的に語を収集したものではないが、この結果からもいかに「めく」に生産力があつたかがうかがえる。
- (注4) 武藤禎夫・岡雅彦編『斬本大系』第一巻～第八巻 東京堂出版

武藤禎夫編『断本大系』第九巻～第二十巻 東京堂出版

明和を境として第一巻から第八巻を前期断本、第九巻以降を後期断本として分けられている。また、後期断本は第九・十・十一巻を安永篇、第十二・十三巻を天明・寛政篇、第十四・十五巻を享和・化政篇、第十六巻を天保以後篇というように時代別で分けられている。

今回の調査では、第一巻から第十六巻までを調査対象とした。第一巻に所収されている「昨日は今日の物語」は「めく」の例が多く見られた古活字八行本によるものを資料とした。

また、近松浄瑠璃（世話物のみ）、洒落本は『日本古典文学大系』、浮世床、春告鳥は『日本古典文学全集』を資料として調査を行った。

- (注5) 「めく」は「つく」と交替しうる可能性のある「ABめく」のみとした。「うめく」「わめく」などのAめくは数にいれていない。また、「あわてふためく」「はしりふためく」などの複合動詞は異なり語として数えないで、全て「ふためく」として扱った。

- (注6) 平林(2002a)では、「つく」の初出例から「中世末から次第に増大し、近世前期においては、一三五語中五三語と、全体の約四〇％を占め隆盛を迎える。そして近世後期から近代においてやや衰えるが、生産性は維持され現代語へと継承されている」と述べている。

現代語で生産性が維持されているという点は疑問である。「つく」という語は使われても、すでに新たな語を生み出す生産力自体はあまりないように思う。

- (注7) 近松浄瑠璃と春告鳥は、ジャンルの違いや、上方語・江戸語という違いがあり、一概に比較できないが、一つの傾向として見ることはできるように思う。

- (注8) 影山(1993)では、以下の例から、実際は「ABABする」も語ではないということを示されている。

- a. 頭がズキズキする。

頭はズキズキ，心臓はドキドキした。(影山1993,p.261)

また、杉浦(2003)では「つく」に関して、つぎのような分析をし、語であることを述べている。

- a. 形態的不可分性 - 手はかさつき，髪はばさついた。

*手はかさ，髪はばさついた。

- b. 統語要素の排除 - ねばつく / *ねばつとつく

- c. 外部からの修飾禁止 - [非常にひりひり]する

*[非常にひり]つく

- d. 語彙照応の制約 - ドアはがたがたし，窓もそうなつた。

*ドアはがたつき，窓もそうなりついた。杉浦(2003)

ただし、aは形態的不可分性というより、象徴詞が「かさ」という二音節のみであることから不適格となると考えられる。

- (注9) 「めく」に関しては慣用的な語が多いせいか「ABABする」と言い換えられないものもある。例えば「あわてふためく」の「ふためく」などは、現代語で「ふたふた」という言い方はしないため「ふたふたする」とは言いがたいであろう。

また、楊(1993)で、「つく」と「する」の意味差について次のような言及がある。違うところは、「ぶらつく」より「ぶらぶらする」のほうが、話し手が時間的に動作をゆっくり楽しむという感じが強い点である。言い換えれば、「ぶ

らぶらす」の方がもっとのんびりして動作を楽しむのである。

この解釈の違いはかなり微妙な違いで、このような意味の差があるとはっきり述べられるかには疑問がある。しかし、「らぶらす」のほうが時間的にゆっくりと楽しむという解釈が生まれる可能性があるのは、「らぶら」という重複形式が反復継続という意味合いを形態により直接提示しているからであろう。平林(2002a)においても「つく」と「する」に対してニュアンスの差を述べているが、はっきりとした傾向があるとは言いがたい。「つく」と「する」の微妙な差については、今後検討していく必要がある。

- (注10) 影山(2004)は、擬態語動詞「～する」を意味の観点から7タイプに分類し、それぞれの概念構造が統語構造に反映されることについて検討している。その7タイプの分類は以下のようなものである。

擬態語動詞の分類

- Type1: 一家のあるじは毎日、**あくせくする**。(主語が意図的に活動する)
- [A] Type2: 母親は赤ちゃんの背中を**トントンした**。(主語が対象に働きかけを行う)
- Type3: 旅行者は観光地を**うろうろした**。(主語が場所を意図的に移動する)
- Type4: 試験の結果に**がっかりした**。(主語が心理的状态の変化を被る)
- Type5: 頭が**ズキズキする**。(話者の身体部分が異常な動きをする)
- [B] Type6: 椅子が**グラグラする**。(何かの物体が異常な動きをする)
- Type7: スープの味が**あっさりしている**。(物体が何らかの性質を持っている)
- (影山2004)

現代語で考えると、「～つく」は「ぱくつく」を除いてタイプ2は考えられない。このように、接尾辞によるものは「する」と比べて制限がある。このような分類からそれぞれの形式の特徴を考察する必要もあると思われる。

参考文献

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2004)「概念構造と統語構造のインターフェイスとしての非対格性・非能格性 - Challenges from Mimetic Verbs -」『関西言語学会第29回大会資料』
- 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店
- 寿岳章子(1956)「擬声語の変化」『西京大学人文学報』7
- 杉浦 隆(2003)「「オノマトベ+つく」の形式を持つ日本語の複合動詞について」『大坂樟蔭女子大学人間科学研究紀要』第2号
- 鈴木雅子(1973)「擬声語・擬態語一覧」『品詞別日本文法講座』10 明治書院
- 鈴木雅子(1984)「擬声語・擬音語・擬態語」『研究資料日本文法 修飾句・独立句編』明治書院
- 田守育啓(1991)『日本語オノマトベの研究』神戸商科大学経済研究所
- 中北美千子(1991)「擬音語・擬態語と形式動詞「する」の結合について」『国文目白』31
- 西尾寅弥(1988)『現代語の語彙の研究』明治書院
- 蜂矢真郷(1986)「メク型動詞と重複情態副詞」『国語語彙史の研究七 阪倉篤義博士古稀記念』和泉書院
- 蜂矢真郷(1998)『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
- 平林一利(2002a)「象徴詞+動詞化接尾辞「つく」について その消長と構成のありかた」『日本近代語研究』3 ひつじ書房

- 平林一利 (2002b) 「象徴詞 + 「めく」と象徴詞 + 「つく」 「めく」型動詞から「つく」
型動詞へ - 」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』 11
- 前島年子 (1967) 「時代を通して見た擬声語・擬態語」『東京女子大学日本文学』 28
- 森田雅子 (1953) 「語音結合の型より見た擬音語・擬容語 その歴史的推移について」
『国語と国文学』 30 - 1
- 宮地裕 (1978) 「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』 115
- 山口仲美 (1984) 『平安文学の文体の研究』 明治書院
- 楊淑雲 (1993) 「擬態語の派生動詞について」『国語学研究』 32
(かわせ すぐる・本学大学院修士課程)